

## コラム

## 図書館史Ⅱ：図書館年次統計制作のよもやま話

しまだ たかし  
島田 貴史

(メディアセンター本部課長)

『慶應義塾図書館史Ⅱ』（以下、『図書館史』）では、メディアセンター本部の総務担当は資料編の作成を担当した。1970年から2019年まで50年に渡る図書館年次統計に関する最初の作業はデータ起こしであった。筆者は入力されたデータの典拠確認と編集作業を担当した。以下はその作業中に感じたことの備録である。

## ・データがない

当たり前の話だが、古い年代ほどデータが存在しない。わら半紙に青焼きされたボロボロの標準統計に入力された項目には各館でバラつきがあり、未記入となっている箇所も少なくない。現在の標準統計が日本図書館協会の『日本の図書館：統計と名簿』や文部科学省の『学術情報基盤実態調査』への対応から標準化されているのに対し、当時は現場の業務（関心）に直結した集計だったと推察している。当館の過去の機関誌を読み返しても、『八角塔』には記事の中で統計が引用されることはあっても統計表は収録されていない。『KULIC』1号にも記載はなく、2号にⅠ. 図書費および製本費、Ⅱ. 蔵書統計、Ⅲ. 利用統計として初めて登場する。『KULIC』が当初は年2回刊行されていたこともあって3号と5号には記載がないが、6号以降は毎号掲載されている。8号9号の前後から『図書館史』資料編に掲載した多くの項目が『KULIC』でも確認できるようになっている。

## ・データが繋がらない

もう1つの悩みはデータの欠損や整合性である。三田図書館の1970年度の蔵書冊数は和書354,707、洋書165,197だが、翌年度は和書278,630、洋書173,171となっていて、大量除籍でもしなければ整合性が取れない数値だが、残っている資料にはこの値しかないのでもそのまま採用した。非図書資料では、昭和と平成の間で区分替えが行われている。日吉メディア

センターの昭和63年度の非図書（タイトル数）は、光学式・磁気媒体の中がCD他7,524とマイクロ他811に分かれていたが、非図書の区分を媒体から資料タイプに変更したため、光学式・磁気媒体からCD他がAV資料/視聴覚資料に移り、光学式・磁気媒体はマイクロ他のみとなって大きく数を減らしている。歴史の中でこうした変更があった項目の扱いには頭を悩ませた。同様に館外貸出件数の扱いにも困った。50年間を通じて増加傾向であったが、2018年度に1,083,225であった件数は2019年度には421,988と半減している。2019年度に行った図書館システムのリプレースによる集計方法の変更が原因であった。このような箇所には注記を付している。

## ・歴史から学べること

図書館予算もこの50年で大きく変わっている。1980年度と『図書館史』資料編に収録された最後の年である2019年度を比較すると、予算額は2.8倍に増えている。ただし、年代ごとの伸び率には大きな違いがある。80年代、90年代、00年代、10年代の増加率は159.5%、152.7%、103.2%、102.4%となっていて、2000年を境に予算の伸び率が鈍化している。1980年、1990年、2000年、2010年、2019年の予算額を当時の米ドルレートで割ったドル建ての金額は2,906,815、7,383,115、16,087,607、20,143,405、16,470,955となり、2019年は1980年の5.7倍で、円貨の増加率である2.8倍を大きく上回っている。90年代の中頃まではドル建てで不足する予算を増額することで支えていたが、00年代は円高が資料の高騰分を吸収していたと考えられる。2010年代に入り図書予算が伸び悩む中で、為替が円安に転じると、資料購買力は大きく損なわれている。例えば、2019年度の予算額を現在の水準である1米ドル145円で割った金額は12,483,848となり、2019年当時よりも約25%落ちている。円安下では相当額の予算への増資がなければカストロフィの日は近いだろう。